

2014年度以降における「地域と企業」の新しい試み

細 川 孝

キーワード

地域と企業
事前学修
現場実習
事後学修
京都
徳島
つるぎ町

目 次

はじめに

I 2014年度における「地域と企業」—京都での学びの深化—

1. 「事前学修」の概要とそこでの課題
2. 「現場実習」の深まりと「事後学修」での学びの成果の確認

II 2015年度における「地域と企業」—徳島での「現場実習」—

1. 「現場実習」を念頭においた「事前学修」
2. 「現場実習」を前にした京都での企業訪問
3. 徳島での「現場実習」から「事後学修」へ

おわりに

はじめに

筆者は『龍谷大学経営学論集』第53巻第3号掲載の拙稿「学びのフィールドとしての地域（現場）—『地域と企業』の6年間—」（以下、前稿）において、2008年度から2013年度までの6年間における「地域と企業」の実践について紹介した¹⁾。それは、北海道オホーツク（網走

市）にある東京農業大学生物産業学部（地域産業経営学科）との共同学習プログラムとして実施されたものである。

前稿でも記したように、東京農業大学との共同学習プログラムとしての「地域と企業」の開講は2013年度が最後となった。2014年度は、（後述の通り事前学修—現場実習—事後学修という学習過程を維持しつつも）京都のみで開講した。そして、2015年度は徳島県で「現場実習」を行い、学習交流は徳島文理大学（総合政策学部・齋藤敦ゼミナール）との間で行った。

筆者は2013年度までの6年間に引き続き、2014年度と2015年度も「地域と企業」を担当することとなった。2014年度は山西万三教授と共同して担当し、2015年度は単独の担当であった。

以上のようなことから、本稿では経営学部におけるプログラム科目²⁾として開講されている「地域と企業」の2014年度以降における新しい試みについて紹介したい。なお、前稿に引き続き、本稿でも「事前学修—現場実習—事後学

修」を。そこには各年度における「地域と企業」の報告も掲載されているので、2012年度までの「地域と企業」の様子についてはそちらで知ることができる。

2) プログラム科目は、「現場で学ぶ経営学」をコンセプトにしている。それは、事前学修—現場実習—事後学修のプロセスから成り立っており、経営コースの三つの履修モデル（「市場と情報を活用する」モデル、「組織をリードする」モデル、「世界に羽ばたく」モデル）それぞれにプログラム科目が置かれている。「地域と企業」は「市場と情報を活用する」モデルにおけるそれである。なお、龍谷大学経営学部は経営コースと会計コースの2コース制をとっている。

1) 前稿において主な対象としたのは、2013年度の「地域と企業」である。経営学部では、2009年度以降「プログラム科目報告書」を編集してい

修」という学習過程³⁾に着目しつつ2年間の実践について振り返ることとする。

I 2014年度における「地域と企業」 —京都での学びの深化—

1. 「事前学修」の概要とそこでの課題

既に述べたように2014年度の「地域と企業」は京都のみで開講した。ここで「京都のみ」というのは、現場実習を念頭においている。2013年度までも事前学修と事後学修は、京都（龍谷大学）で行っており、この点では2014年度も変わることはなかった。

2014年度の科目担当者は、山西教授と筆者であった。この年の特徴の一つは、受講生の都合から（第1学期中の）事前学修を二つのグループ（＝二つの曜講時）に分けて実施せざるを得ない期間があったということである。

「地域と企業」はサマーセッションの開講科目（集中講義）であるが、夏期休暇中の集中講義だけでは完結することができないため、従来から第1学期中に事前学修を行ってきた。2013年度までは受講生全てを対象に一括して事前学修（個別の企業を対象にしたグループ研究を除く）を行ってきたが、2014年度は二つのグループに分けて行わざるをえなかったということである。

第1学期における事前学修は、次のような内

3) 筆者は前稿において、日本学術会議 大学教育の分野別質保証推進委員会・経営学分野の参照基準検討分科会「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 経営学分野」（2012年8月31日）を手がかりにしつつ、「地域と企業」における実践を「実習・現場教育」の要素を含んだものであるのが特徴として捉えることができるものと認識した（拙稿「学びのフィールドとしての地域（現場）—『地域と企業』の6年間—」『龍谷大学経営学論集』第53巻第3号、2013年2月、101頁を参照）。「経営学分野における参照基準」では、「実習・現場教育」という学修方法について「現場を体験し、現場を肌で感じながら、教科書や講義などで出てきた知識を活用したり、それには出てこない知識を自ら発見して手に入れたりするための良い機会となる」（「経営学分野における参照基準」17～18頁）としている。

容であった。

第1回（4月30日） ガイダンス

※5月14日に、ガイダンスの補講を兼ねたグループ研究についての打ち合わせを行った。

第2回・第3回（5月17日 I II 講時）

京都の伝統産業（うち II 講時は、講演会）

第4～9回

・Aグループ：金曜日 V VI 講時（5月23日、6月13日、27日）

・Bグループ：土曜日 I II 講時（6月21日、7月5日、12日）

※第4回・第5回は、京都企業・京都産業に関する総論（山西教授担当）。

第6～9回は、島津製作所の事例研究（筆者担当）。

第10～15回 企業研究

受講生を4つのグループ（京都の酒造メーカー、京都の金融機関、京都における六次産業化、京都のお菓子メーカー）に分けて、山西教授と筆者が2グループごと担当した。

上記の通り、第10～15回はグループ研究であり、少人数（各グループ3人程度）の受講生を2人の担当者（山西、筆者）がサポートする形で進めたので、日程調整は容易であったが、第4～9回については、2グループに分けて同じ内容を繰り返して行わざるをえなかった。実際には、このような便宜を図りつつも、履修状況は芳しくなかった⁴⁾。この点については後述の通り、2015年度において一定の対応を行った。

さて、事前学修では、経営学部の「特別講義・我が社にとって京都とは」の講義録や京都産業学センターのブックレット『島津製作所』を用いるなどして、京都の産業や企業に対する

4) この点は、2013年度以前においても同様であり、とりわけ4年生において顕著であった。それは、就職活動の時期と重なることも理由の一つであるが、サマーセッション科目であるとともに現場実習をともなった本科目がいわゆる「楽勝科目」として認識され、安易な履修態度を生起させている可能性も否定できない。

認識を深めるように努めた。並行して、受講生の関心に即しつつ、グループ研究の対象企業を選定した。それが前述の4グループである。

ここで第1学期中におけるグループ研究の取り組みについて、筆者が担当した京都における六次産業化のグループを例に紹介したい。六次産業化⁵⁾というテーマは、受講生の関心にそって取り組んだものである。第1学期中は6次産業化そのものについての認識を深めることに主眼をおいた。あわせて政府や京都府・京都市の政策動向を調べていった。このような作業を踏まえ、実態調査（ヒアリング調査）をお願いする企業の選定を進めた⁶⁾。

なお、筆者が担当したもう一つのグループ（京都のお菓子メーカー）はヒアリング調査にまでご協力いただきながら、受講生がサマーセッション期間中に履修を放棄したことにより成果をまとめることができなかった。受講生自身の履修態度に問題があるとはいえ、担当教員としての責任を痛感している。

以上のように、京都における「地域と企業」に焦点を絞って開講したことと、学生の履修指導の面での課題を認識せざるをえなかったのが、2014年度の「事前学習」の大きな特徴であった。

2. 「現場実習」の深まりと「事後学修」での学びの成果の確認

サマーセッション期間に行われた現場実習と事後学修は、次のような内容であった。

8月25日 II 講時 事前学修のまとめとグ

5) 六次産業化法（地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律）では、「六次産業化」について「一次産業としての農林漁業と、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す」取り組みとされている（同法の前文、参照）。

6) ヒアリング調査を踏まえた受講生の研究成果は、片山直登・岸田大輝「六次産業化の理念と実態—京都におけるA社の事例の考察を中心に—」『龍谷大学経営学論集（学生論集）』第54巻、2015年3月、20～30頁を参照されたい。

ループ研究の進捗状況報告

Ⅲ・Ⅳ講時 京野菜農家の講演とディスカッション

8月26日 フィールドワーク（終日。訪問先は、午前が島津創業記念資料館、高瀬川の運河。午後が京都伝統産業ふれあい館、川島織物セルコンの織物文化館と工場）

8月27日 フィールドワーク（終日。訪問先は、午前が京セラ本社稲盛ライブラリーとファインセラミック館。午後がオムロン京都太陽）

8月28日 フィールドワーク（午後。京都市産業技術研究所と京都市高度技術研究所）

8月29日 II 講時 フィールドワークのまとめとディスカッション

Ⅲ・Ⅳ講時 グループ研究の中間報告

9月8日 Ⅲ・Ⅳ講時 グループ研究の最終報告（終了後、17時から反省会を開催）

8月25日から29日までは5日間（月曜日から金曜日まで）連続の開講であり、少し時間を空けて9月8日に最終日を設定した。最後の2日間は事後学修として位置づけられる。

現場実習の際に行った2日半（26日から28日）のフィールドワークは、大学院経営学研究科で取り組んでいる京都産業学のネットワークなどをもとに山西教授がコーディネートしてくださったものである。フィールドワークの初日（26日）は京都の伝統産業を中心に、そして2日目（27日）は京都の近代産業に焦点をあてて、さらに3日目（28日）は自治体の産業支援機関といったように、それぞれの日にテーマ性をもたせてくださった。

なお、フィールドワークでは対象に含めることができなかったこともあり、外部講師をお招きしての講演は、京野菜農家の方をお願いした。現場実習の期間を通じて、京都における多様な産業や企業について知る機会を受講生に提供で

きたのではないかと考えている。

上記の訪問先のうちでオムロン京都太陽⁷⁾は、オムロンの特例子会社⁸⁾として障がい者の雇用就労の機会を提供している。同社は、京都企業のCSR（企業の社会的責任）の実践として注目すべき存在である。また、自治体の産業支援機関も学生たちが普段あまり接することはないが、京都の産業にとって重要な役割を果たしている。京都の産業や企業に対する受講生の知見を深めるのに貴重な機会となった。

さて、グループ研究は、8月25日の進捗状況報告、29日の中間報告を経て、9月8日の最終報告を迎えた。先に言及したように履修を放棄したグループがあったため3つのグループが企業研究の成果を報告した。テーマは、「京都の老舗 日本酒メーカー『月桂冠』～京都と日本酒の関わりに迫る～」「京都の地域金融機関」「6次産業化の理念と実態」である。

3つの報告は完成度においてはばらつきが見られたが、それはおおむね「事前学修」の履修状況と比例していた。内容的には、京都における「地域と企業」の関係を念頭において考察を踏まえたものであり、本科目の趣旨に沿ったものであると評価した。なお、先に記した現場実習での訪問先にはグループ研究の対象は含まれていないが、受講生たちは（京都の金融機関グループを除いて）グループごとに自主的に企業訪問を行った。このことは「現場で学ぶ経営学」（プログラム科目のコンセプト）のありようとして望ましいものであると評価できよう。

最終日（9月8日）に行った反省会に参加した受講生からは、「地域と企業」で学んだことや現場実習の印象などが語られた。概ね科目の趣旨は理解され、受講生にとって貴重な学びの機会となったことが確認できた。そこでの議論も踏まえ、筆者は経営学部プログラム科目総括会議（10月22日開催）において、「2014年度プログラムの評価（特記事項）」として、以下の7点を記した。

- ・初めて全てのプログラムを京都で実施したが、特に大きな問題はなく終えることができた。見学先についても学生には概ね好評であった。
- ・事前学習は、学生の都合を考慮し、2グループに分けてやらざるを得なかったが、例年よりも早い時期から実施できた。
- ・グループ研究とあわせ企業等を訪問したことによって、地域という資源がいかに重要であるかを学ぶことができた。
- ・途中で履修辞退や履修放棄する学生が目立った（4回生4人）。
- ・（当然のことではあるが）意欲の高い学生とそうでない学生の差が著しかった。
- ・サマーセッション期間については、「受講記録」の作成を求め、学習成果の定着を図った。
- ・ここ数年と同様に教員2人（山西、細川）で担当し、スムーズな対応ができた。社会的マナーを受講生に強調した。

以上のように、2014年度における「地域と企業」は課題を残しながらも、初めての「京都のみ」でのプログラムとして終えることができたのである。

Ⅱ 2015年度における「地域と企業」 —徳島での「現場実習」—

1. 「現場実習」を念頭においた「事前学修」

経営学部において2015年度の「地域と企業」の開講に向けて一定の議論が行われ、「京都と

7) オムロン京都太陽は1985年3月に設立、1986年4月から操業している。同社の出資はオムロンが61%、社会福祉法人太陽の家が39%である。

8) 特例子会社は、障害者の雇用機会の確保（法定雇用率の義務付け）に向けて、障がい者の雇用の促進および安定を図るため、事業主が障がい者の雇用に特別の配慮をした子会社を設立し、一定の要件を満たす場合には、特例としてその子会社に雇用されている労働者を親会社に雇用されているものとみなすというものである。厚生労働省「『特例子会社』制度の概要」（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/shougaisha/dl/07.pdf>、2015年9月16日アクセス）を参照。

他の地域との比較」という視点と「他大学の学生との交流」というアプローチが課題とされた。ところで、先に記したプログラム科目総括会議では、筆者は以下のようにも記した。

2015年度以降のプログラムに向けて

- ・基本的には、京都中心のプログラムとして継続してはどうか。
- ・学年暦が変更されることの影響は大きくないと思われる。
- ・他地域との比較という点では、徳島の神山（IT企業のサテライト）や上勝（葉っぱビジネス）などが可能性としてあげられる。

2015年度の「地域と企業」を引き続き担当することとなった筆者は、ゼミ間での交流に取り組んだ経験のある徳島文理大学総合政策学部 of 齋藤敦准教授と、徳島県つるぎ町役場の古林敏美企画課長に相談させていただいた。お二人からは「地域と企業」に対するご協力について快諾いただき、当初「可能性」として考えていた徳島での「現場実習」を具体化することに着手した。お二人との連絡を取りつつシラバスの作成を進めたうえで、2015年3月10日には徳島文理大学を訪問するとともに、翌日には古林課長にご同行いただいて神山町と上勝町を事前視察した⁹⁾。

以上の準備作業を踏まえ2015年度の「地域と

企業」を開講した。2015年度の事前学修は、2014年度の反省から、シラバスにあらかじめ第1学期の開講曜講時（木曜日Ⅱ）を示した。この点で、受講生が少なくなる（追加登録を含め3年生ばかりの5人とどまった）ということはあるが、欠席もほとんどなくスムーズな形で進められた¹⁰⁾。

第1学期中の事前学修のテーマや内容は、次のようである。

- | | |
|-------|----------------------------------|
| 4月9日 | ガイダンス |
| 4月16日 | 京都はどんな都市か |
| 4月23日 | 京都の産業について |
| 4月30日 | 京都の観光について |
| 5月7日 | 京都の農林業について |
| 5月14日 | 過年度の「地域と企業」と徳島文理大学との交流について |
| 5月28日 | 京都企業の特質について |
| 6月4日 | 京都企業に関するDVD上映、グループ研究についての打ち合わせ |
| 6月11日 | グループ研究（第1回報告） |
| 6月13日 | 右京区京北フィールドワーク（6月25日、7月23日の授業を振替） |
| 6月18日 | グループ研究（第2回報告） |
| 7月2日 | 京野菜農家の講演とディスカッション |
| 7月9日 | 徳島の産業と企業について |
| 7月16日 | 第1学期（事前学修）のまとめとサマーセッションについて |

以上の内容は、事前に示したシラバスとは変更になっている部分もあるが、京都における「地域と企業」に関する知識を得るとともに、徳島の産業や企業についての基本的な情報を得ることに主眼をおいたものであることは共通している。したがって、「地域と企業」の科目の

9) 上勝町（徳島県勝浦郡）は「葉っぱビジネス」で知られている。その中心となっているのが、株式会社いろどりである。同社の代表取締役社長である横石知二氏が、農協職員であった頃に事業をスタートさせた。同氏には『そうだ、葉っぱを売ろう！ 過疎の町、どん底からの再生』ソフトバンククリエイティブ、2007年などの著書がある。上勝町については、農林水産省中国四国農政局「葉っぱがお金に化ける?!」家の光協会、2007年などの文献も参照。

なお、神山町と上勝町を視察するのに先立って、午前中に阿波スピンドルをお訪ねした。これは現場実習の際に、木村雅彦社長にご講演をお願いすることを考えていたからである。

10) 2014年度に典型的であったように、従来から履修状況、出席状況が芳しくないのは4年生以上の学生が多い。この点で、サマーセッション科目の履修の機会を保障しつつ、受講生の学習意欲を引き出すための工夫が課題であると認識している。

趣旨に沿って事前学修は行われた。

グループ研究については、当初受講生5人全員が共同して取り組んでいたが、内容から見て「京都企業の事例研究—タキイ種苗—」と「京都の農業と食文化」の二つのテーマに分けて作業を進めることが適切と判断した（テーマは、最終的な報告テーマである）。7月2日に、京野菜農家の方に講演いただいたのも、このようなグループ研究の方向性（二つのテーマは、いずれも農業に関係する）を考慮してのものである。

6月13日には京都市右京区京北を訪ね、地域の産業遺跡等を訪ねるフィールドワークを行った。これは、一口で「京都」と言っても、多様な地域があることを知るためである。学外のNPO（非営利組織）が行っているフィールドワークに参加させていただいたものであるが、他大学の学生や社会人などと交流する機会となり、受講生にとっても刺激的であった。参加者全員がグループに分かれディスカッションを行い、その内容を全員に報告する機会もあり、受講生のうちの何人かは壇上に上がってスピーチを行った。

第1学期終了時点までには、徳島での現場実習の詳細な内容、そして訪問先企業も確定したので、受講生にはその情報が伝えられた。なお、当初、神山町とあわせ上勝町への訪問を考えていたが、同一日に二つの町を訪問することは時間的に困難であることから、この時点で訪問先は神山町のみとした。

2. 「現場実習」を前にした京都での企業訪問

サマーセッションの期間に徳島を訪問するのに先立って、夏期休暇に入ってしまう時期にタキイ種苗¹¹⁾へのヒアリング調査とあわせ研究農

場の見学を行った（8月6日）。タキイ種苗にはこの間、毎年のように「地域と企業」や筆者が担当する演習（3年）で訪問を受け入れてくださっている。今年度も受け入れをお願いしたところ快諾いただいた。紙面を借りて改めて御礼申し上げたい。

さて、第1学期中のグループ研究を踏まえて、受講生から先方（タキイ種苗）にお伝えした質問は、以下のようである。

1. 御社と京都（企業）との関係について

- 京都に本社をおくメリットとデメリットをどのように考えておられますか。
- 御社は京都の代表的な長寿企業の一つですが、他の企業と共通していると考えている点などありましたらお聞かせください。
- 御社の事業と京野菜との関係がございましたら、お聞かせください。

2. 種苗業界について

- 種苗業界における御社のポジションをどのように考えておられますか。
- 種苗業界の展望（市場規模、競合企業の動向など）をどのように考えておられますか。
- グローバル市場の動向と御社の戦略についてお聞かせください。

3. 御社の研究開発について

- 桃太郎トマトの開発についてお聞かせください。
- F1の開発についてお聞かせください（開発の仕組み、人材の育成など）。
- 市場のニーズを把握するためにどのような取り組みをされていますか。
- 家庭用菜園向けの開発というものもあるの

11) タキイ種苗はサカタのタネ、カネコ種苗などとともに日本を代表する種苗会社である。1835年創業（1920年会社設立）の長い歴史を有している。F1（交配技術による雑種一代）に強みを有している。非上場、オーナー経営、本業重視、伝統と革新など京都企業の特徴を体現した会社である。同社は、竹原義郎『ほんものの京都企業』PHP

研究所、2010年において、イシダ、龍村美術織物、福寿園、松栄堂、月桂冠、鶴屋吉信とともに「存在価値と存続価値」を有する「ほんものの」京都企業として取り上げられている。タキイ種苗の研究農場付属園芸専門学校については、川上康介『五感で学べ ある農業学校の過酷で濃密な365日』オレンジページ、2011年がある。

でしょうか。

4. 御社の人材育成等について

- 採用、人事異動、社内研修などに特色があればお聞かせください。
- 社内の情報共有で特徴的なことがありましたらお聞かせください。

訪問当日は、以上の質問に対して丁寧な説明をいただき、それらは受講生のグループ研究に活かされた（徳島文理大学との学習交流の際、発表用プレゼンテーションに盛り込まれた）。今回の訪問の特筆すべき事項は、タキイ種苗の研究農場を訪問させていただいたことである。これまで本社にヒアリング調査でお伺いすることはあっても、研究農場を訪ねることはなかった。研究農場では改めて種苗の開発の重要性をお聞きするとともに、広大な研究農場を短時間であったが見学させていただくことができた。

ヒアリング調査と研究農場の見学という貴重な機会を得たことで、受講生のグループ研究はいっそう進んだ。8月27日には、現場実習を前にした最後の報告会（授業）を行い、グループ研究の進捗状況を確認した。そのうえで、翌週（8月31日から）の徳島での現場実習に臨んだのである。

3. 徳島での「現場実習」から「事後学修」へ

徳島での現場実習は、つるぎ町役場の全面的なご協力を得て、8月31日から9月4日までの5日間にわたって行われた。宿舍の手配やバスでの送迎を含め古林課長をはじめとするつるぎ町役場のみなさまのお力添えがなければ、2015年度の「地域と企業」は完結させることができなかった。学生との交流の機会をつくっていただいた徳島文理大学の齋敦准教授ともども感謝申し上げたい。

さて、現場実習での訪問先と各社の概要等は、以下のようなものである。

初日（8月31日）には、美馬市にある河野メリクロンのあんみつ館を訪問した。同社の事業は、洋ラン（シンビジウム）の品種改良とメリ

クロンの生産販売及び関連事業である。1965年に現社長の河野通郎氏が洋ラン栽培に着手し、1977年に同社が設立されている。今日では、世界的な洋ランのメーカーとして知られている。あんみつ館は同社の展示館であり、美しいランの花やランを活用した商品を見学した。

2日目（9月1日）は名西郡神山町を訪ね、NPO 法人グリーンバレーの大南信也理事長の講演を聞かせていただいた。テーマは、「神山プロジェクト～創造的過疎から考える地方創生～」であった¹²⁾。神山町を現場実習の訪問先としたのは、地域振興や地域活性化への関心というよりも、IT 企業のサテライトオフィスが進出するなどして、地域という（経営）資源が活用されている点に着目したからである。加えて「経営」という概念が NPO や地域にとっても重要であると考えられるからである。

IT サテライトは、抜群の IT 環境（光ファイバー網の敷設など）に支えられたものであるが、同時に「サテライトビジネスでは、豊富な自然環境で働くことで、仕事による精神的ストレスの軽減やビジネスアイデアの自由な発想ができることを学んだ。自然に囲まれた『なにもない』環境だからこそ生まれるものがあると考えられる」との受講生の指摘も有益であろう。

午前中は大南氏の講演を拝聴し、午後からは実際に古民家を改造したサテライトオフィスやインキュベーション施設を視察した。続いて、神山のもう一つの顔である「神山アーティスト・イン・レジデンス」の取り組みについて説明を受け、実際の展示作品にも案内いただいた。その一つが山の中にある「隠された図書館」である。これは、招聘された作家が「本を納めることが出来るのは人生で三回、卒業、結婚、退

12) 神山町はテレビや雑誌などでも紹介されることが多く、全国的な注目を集めている。この日も、龍谷大学からとは別に、東京から経営者らのグループが訪ねてきており、一緒に講演を拝聴した。偶然、筆者の隣に座った外資系保険会社に勤務する方は、本学経営学部出身であった。なお、神山町の取り組みについては、篠原匡『神山プロジェクト』日経 BP、2014年がある。

職のとき住民だけに許される」というコンセプトで製作したものである。山の中にある小さな図書館は不思議な雰囲気醸し出していた。

3日目(9月2日)は、午前中に阿波スピンドルを訪問した。木村雅彦社長の講演や同社の事業紹介に続いて工場見学の機会を与えていただいた。また役職者の方との懇談の機会を与えていただき、質問や意見交換することができた。同社のルーツは、江戸時代初期の天然繊維の麻糸・絹糸・絹糸に撚りをかける「糸車」に使用する鍾の製作に遡る¹³⁾。

木村社長の講演は阿波の国(徳島の旧名)の歴史から始まった。これは、会社の所在地である吉野川市(旧麻植郡)は、古代朝廷の祭祀を担当したとされる阿波忌部の本拠地であったからである。当時機織りは重要な産業であった。雅彦社長は、江戸初期の初代から数えて木村家の12代目にあたる。2005年から社長の任にあり、経済産業省「明日の日本を支える元気なもののづくり中小企業300社」の認定(2006年)、一般財団法人日本科学技術連盟「日本品質奨励賞」の受賞(2012年)など経営の近代化、経営革新に積極的に取り組まれている。

同日の午後は、徳島文理大学(齋藤ゼミナール)との学習交流を行った。「地域と企業」の受講生は二つのテーマで報告を行い、齋藤ゼミの学生は「キノコの生フレーク」「遊山箱」「和三盆バウムクーヘン」について報告した。これは、同ゼミで取り組んでいるドイツの文化と徳島の文化を融合させた地域産品の開発に向けた実践的な取り組みを報告したものである¹⁴⁾。終

了後には両校の学生と教員とで懇談の機会をもった。

4日目(9月3日)の午前中には、つるぎ町の地場産業である半田手延べ素麺の工場を見学させていただいた。合併前の旧半田町は古くからの素麺の産地である。半田素麺は、三輪素麺(奈良県桜井市)、揖保の糸(兵庫県)などと並ぶ代表的な産地である。町内に35の素麺業者¹⁵⁾があるが、今回は北室白扇を訪問し、お話を聞きながら工場を見学した。

同日の午後は、山間急傾斜農業を世界農業遺産に登録する取り組みを進めている、つるぎ町役場の商工観光課にお話を聞きつつ現場を訪問する予定であったが、あいにくの天候のため夜の懇親・交流会の際にお話を聞くにとどまった。篠原尚志課長から来年の申請に向けて準備を進めている様子を語っていただいた。

5日目(9月4日)は、「地域ブランド産品創出事業」として2015年3月に開店したばかりの阿波食ミュージアム(徳島県名西郡石井町)を訪ねた。「阿波食ミュージアム¹⁶⁾」と銘打っているが、地元産品を販売している小売業である。「旬菜食堂」という名称の食堂を併設している。事業の目的は、「地域経済の活性化・地

15) この数値には、半田手延べそうめん協同組合に加入していない事業者を含む。数字は、古林課長にご教示いただいた。

16) 「阿波食」は阿波(awa)と和食(wasyoku)を組み合わせているとのこと。ネットで wasyoku と検索した際に、awasyoku もヒットすると考えてのことである。受講生の一人は「徳島に4日間行ってみて感じたことといえば、いろいろ企業を回ってみてみんなが徳島を愛しているということだ。外資系の会社で経験を積んで徳島に帰ってきて阿波食ミュージアムを興した話を聞いたが、まず驚いたのがネーミングだった。昔の日本の地名は知らない人が多いが徳島は阿波踊りが有名なものでそれと和食をかけることで観光に来た外国人が興味を持って検索してくれるようにした工夫はすごいと思った。実際に中に入ってみたら中の商品は徳島の名産品や野菜で占められていたの、観光客だけでなくその土地の主婦なんかも気軽に買いに来ることが出来てよいと思った」と述べている。

13) 同社の「Corporate Profile」による。そこでは、スピンドルの製作は1868年からであり、法人化されたのは1943年であることが記されている。

14) この報告を聞いた受講生からは「地域の特産物や地域の歴史を絡みあわせた商品開発を行っている、学生が地域のために行動している状況を知ることができました。企業が地域という資源を活用しているケースを学んできましたが、学生も地域という資源を生かして、価値に変えることができることを実感することができたし、自分もまだまだがんばらないといけないと思いました」という感想が寄せられている。

域イメージの向上」であり、地元（徳島県板野郡板野町）の竹内演芸という野菜や花の苗の生産・販売を事業としている会社が運営している。対応いただいた小川満大店長は、外資系企業等での経験を持つ方であり、地元に戻ってきて地域の活性化に意欲的に取り組んでおられる。

さて、今回の現場実習のベースキャンプ¹⁷⁾となったのが、家曾敷^{みつひろ}という民宿である。標高700メートルの山間部に位置するが、自然環境が豊富だけでなく、快適な設備が整っている。あいにくの天候の日が多かったが、そのことが幸いしてほぼ前日、全面に広がる雲海を堪能できた。

この民宿は、大阪で事業を成功させたご夫妻が、夫人の出身地であるこの集落に戻り、築約200年の古家を改装して6年前に開業したものである。受講生からは「観光業では、『お遍路さん』としてのもてなしの文化が、接客サービスの高い質に関係していると考えられ、文化も立派な地域資源であること学んだ。特に、宿泊施設を利用してからそう感じられた」との感想が寄せられている。山奥とは思われない快適な環境で、学生たちの学びを支えていただいた。

受講生たちの学びの成果は「『地域と企業』で学んだこと」のテーマでレポートとしてまとめてもらった。本稿で引用している受講生たちの感想や意見は、そこに記されたものである。これらのレポートとそれに対するリプライをもって、2015年度の事後学修としたいと考えている。

おわりに

以上の通り、やや冗舌な記述も含んでいるが、2014年度と2015年度における「地域と企業」における学びの様相をお伝えすることができた

と思う。本稿のタイトルにある「新しい試み」は、2014年度の「京都のみ」での「地域と企業」、2015年度の徳島での現場実習であった。

本稿を執筆しながら2週間ほど前の徳島での現場実習を振り返っている。何より無事にスケジュールを終えることができたこと、そして学生たちと一緒に「地域と企業」に関する多くの知見を得たことを素直に喜びたいと思う。同時に、以下のように二つの課題も強く感じるのである。それは、同時に次年度以降に向けた課題の提示でもある。

一つ目は、現場実習を通じて学んだことを、経営学の学びに位置づけることの重要性である。「現場」での体験を通じて多くのことを学ぶことができる。しかし、それを一時的なものとして記憶にとどめるのではなく、経営学的な含意を確認する作業が求められよう。この点では、筆者の能力不足と意識的な取り組みの欠如を痛感する。

例えば、現場実習の期間、見学を終えた後にミーティングを開催し、ディスカッションを通じて事例の持つ意味を確認する。あらかじめ訪問するに際して、学びの観点を示す。このようなことがなければ、「見学しっぱなし」となってしまうかねない。「現場を体験し、現場を肌で感じながら、教科書や講義などで出てきた知識を活用したり、それには出てこない知識を自ら発見して手に入れたりするための良い機会」(「経営学分野における参照基準」。下線部、引用者)ということを変更して想起したい。このことを強調するのは、「地域と企業」との関係に関する認識にとどめるのではなく、経営学の一般的な認識にまで高めたいという趣旨である。

二つ目は、以上の点と関わるが、現場実習で訪問する企業に関する知識、対象とする企業が経営学の学びにとって有する意義をあらかじめ受講生に提供する必要があるということである。このことは簡単なことではないが、数年間同じ地域を対象にするのであれば、前年度までの情報を蓄積して役立てることは可能であろう。京都で完結するような形での「地域と企業」であ

17) 通常「ベースキャンプ」は登山する場合に設置される。山の中にある家曾敷から徳島市や神山町までは車で1時間半以上かかり、同じくつるぎ町の中心部までも半時間ほどかかる。下山して訪問先に移動していくことになるが、筆者や受講生の毎日にとっては、家曾敷がまさにベースキャンプであった。

れば、すでに経営学部は一定の蓄積を有しているが、他の地域と比較しての場合には、よりいっそう意識的な取り組みが必要である。

筆者はこの2年間の「地域と企業」の担当を通じて、「地域と企業」との関係について受講生とともに多くのことを学んだ。同時に筆者は「地域と企業」を経営学の教育においてどのよ

うに位置づけ、これをどのように改善していくべきかということについて学ぶ機会を与えられた。その経験は、本科目のみならず他の講義科目や演習にとっても有益であったと思う。このことを最後に確認して稿を閉じることとしたい。

(受理 2015年9月17日)